

題目：SNS での自己主張の日米比較—社会環境の性質と匿名性の影響—

氏名：塩崎美有

指導教員：結城雅樹

SNS は世界中で多くの人が使っており、世界中の情報を収集、共有でき、世界が均一化している。一方本研究では、Lu et al. (2020)で発見された自己主張の文化差を SNS 上でも見出せないかを試みた。Thomson (2016)では関係流動性と SNS での行動が関連していません、行動の規定因の解明には至らなかった。本研究では SNS における自己主張の程度の文化差を社会生態学的アプローチと SNS 特有の匿名性により追究した。SNS を利用している日本人、アメリカ人各 250 人をクラウドソーシングサイトで募り、オンライン質問紙に回答してもらった。4つの指標（所持している SNS アカунトの種類、実名・匿名アカウントでの自己主張、関係流動性、SNS での評判行動）を用いて日本人とアメリカ人の SNS における行動傾向を比較をした。その結果、日本人はアメリカ人より匿名アカウントを好む傾向があった。またアメリカ人の方が日本人よりも実名、匿名いずれのアカウントでも自己主張度が高いことが示され、予測通りであった。しかし、匿名アカウントになると日本人は殊更自己主張するだろうという予測は支持されず、アメリカ人も日本人と同じく自己主張が高まること示された。つまり匿名性は国や社会環境に関わらず、均等に自己主張を促す。そもそも匿名アカウントではポジティブ評判追求やネガティブ評判回避行動を生まず、文化差が見られない。匿名アカウントでは行為者が不明であり、称賛を得づらいつ同時に排斥もされる可能性が低く、その社会での適応課題達成に向けての振る舞いをする必要がないからだろう。そして実名、匿名アカウントにおける自己主張への影響モデルに違いが見られた。実名アカウントでは関係流動性とポジティブ評判追求が媒介し、関係流動性が高いほどポジティブ評判追求も自己主張も高くなっていた。一方、匿名アカウントでは関係流動性と評判行動の間に関連がなかった。また、ネガティブ評判回避から自己主張への効果はどちらの種類のアカウントにおいてもポジティブ評判追求より影響力があり、さらに実名アカウントの方が強いという有意差が見られた。つまりネガティブ評判回避行動をするほど、実名アカウントで自己主張をしなくなる。このように社会生態学的アプローチで文化差を見出し、匿名性により人々の心理や SNS での行動への影響を示唆したことが、本研究の意義と言えるだろう。